六、日本聖公会主教教書（一九六四年(昭和三九年)十二月十日）

降誕日またはその前後の適当の機会に、聖職はその会衆に対して
この教書を朗読するとともに、「キリストの体における相互責任
と相互依存」の趣旨が全会衆に徹底するよう努められたい。

御降誕のよき日、われらはここに、父と子と聖霊の名により、主にあってわれらの兄弟姉妹たる忠信なる各位の安否を問い、各位の上にいよいよ聖寵の豊かならんことを祈るものであります。

さきに教務院常議員会議は、明春わが日本聖公会第二十八総会の開催せられようとするこのときにあたり、昨夏トロントに開催せられた全聖公会会議の成果の基本精神を、この際いっそう、わが日本聖公会に徹底せしめたいとの趣旨から、主教教書の発布をわれらに要請せられたのであります。

この全聖公会会議において、カンタベリー大主教は「みずからのために生くる教会は、やがてみずからによって死するであろう」との警告を与えられたのでありますが、この会議において高調せられた基本的な精神は、要するにわれらの現状に対する深き反省であり、またこの反省に基づいての、主キリストの一つなる体としての教会の共同性と、その共同性の具現のための、個人と個人、集団と集団、人種と人種、またあるいは聖職と信徒、教会と教会、教区と教区、管区（プロビンス）と管区、教団（コミュニオン）と教団その他あらゆるわれらの場における相互性の確認であったのであります。

時代はまさに、一つなる世界、一つなる教会――一つなる共同体の具現をわれらに呼びかけております。われらはこの一つなる共同体の具現をめざして、つねに謙虚に、相互に告げあい、相互に耳を傾けあうとともに、また相互に受け、相互に授けて、相互に仕えあうことをしなければならないのであります。

さて聖公会会議において一つの重要なる文書が提示されたのであります。「キリストの体における相互責任と相互依存」と題するこの文書を、われらはこの際むしろ、この教書の主要なる内容をなすものとして各位に送り、各位がこれを熟読せられんことを切望いたすものであります。この文書は実に、前述した精神のもとに、全世界の一つなる聖公会としての、われらの先ずあるべき新たなる姿と新たなるその具現の方向とを、具体的に提示しているものであります。

この文書の基本精神たる主キリストの体なる教会における共同性と相互性とを、各位が先ず各位の教区、各位の教会において、それぞれどのように具現し生かすことができるのでありましょうか。われらは先づ第一に、その点について各位が真摯なる態度をもって充分に考究せられんことを要請いたすものであります。

これと同時に、かかる新たなる具現の方向において、いったい日本聖公会としていま何をなすことができるのでありましょうか、その点についてわれらはここに一つの提案をいたしたいのであります。日本聖公会は過ぐる数年間、大斎克己献金を日本聖公会全体の必要のために献げ用うることをいたしてまいったのでありますが、幸いにして今年は、その一部を全聖公会としての必要に応じて献ぐることができたのであります。明年の大斎克己献金によっても亦、同様の計画がなされております。この時代における全聖公会としての必要が何であるかを、何処にどのような必要があるかを、充分に学び知るとともに、またその必要に対して日本聖公会は、いったい何を貢献することができるのであるかを見つけいだすと言うことは、日本聖公会にとってきわめて重要な意義ふかいことであります。この意味において、明年の大斎節には、われらは世界各地域における聖公会について学び知ることをいたすとともに、また代祷をささげ、一層の努力をもって克己献金を実行いたすようにいたしたいと思うのであります。また、かかる計画が今後、毎年の大斎節に継続して実行されるにいたるならば、更に意義ふかいことと思うのであります。

願わくはその尊き血をもって公会を贖ないたまいし主イエス＝キリストの祝福、各位の上に豊かならんことを。

救主降生千九百六十四年十二月

神にありて各位の父なる
日本聖公会主教会

ミカエル　八代　斌助
テモテ　中村　信蔵
パウロ　町島　甚兵衛
ヨハネ　大久保　直彦
パウロ　上田　一良
イサク　野瀬　秀敏
パウロ　黒瀬　保郎
ダビデ　後藤　真
マタイ　森　譲
マルコ　小池　俊男

アングリカン・コングレス（世界聖公会会議）よりのメッセージ

『自分のためにのみ生きる教会は、自ら死に至るであろう』（ロマ書一四章七節参照）

この言葉は、聖公会（コングレス）世界会議開催中に、カンタベリーの大主教によって与えられた警告である。そして私達は、この言葉を心に銘記した。何故なら、神は聖霊の働きによって、私達の心を動かし、私達がキリスト者として神より与えられた任務について真剣に考えることを促しておられるからである。自分本位のやり方は、棄てさらなければならない。

一、神は私達を仕える教会たるべく召し給うた。

神は、神の御子、イエス＝キリストによって、私達を贖われた。イエス＝キリストは僕(仕える者)として私達のうちに来り給うたのである。

私達は、教会の外にいる隣人たちに対して、また、異った国に、民族に属する兄弟姉妹に対して、どのように仕えるべきであるかを学ぼうと決意を新にした。

私達は、神が色々な人種民族を含む世界的な交わりを与えて下さっていることを感謝し、その交わりの故に、一つの教会のもつ才能や富が、他の教会の必要に応えることが出来ることを感謝する。

誰もがみな神から受けている。誰にも、みな、他に与えるように呼びかけられている。

私達は、もはや、ある教会は与えるばかりであり、ある教会は受けるばかりである、というようなことを考えることは出来ない。私達は、信徒のすべてが、真の感受性にとんだキリスト教の愛をもって、人、金、思想等を、与えまた受けることを学ぶように祈る。

世界の聖公会の交わりは、精神的、物質的に、さし迫った必要に直面している教会や人々を援助する新しい方法を見出さなければならないと確信している。ある教会は存亡の危機にさらされている。ある教会は緊急の事態に直面している。誰も、ただ一人だけで、主の挑戦に応えることは出来ない。このことは、私達が自分のために費しているものを、再検討させることになる。これこそ、キリスト教の愛の実践ということの意義である。例えば、都市の教会に新しいオルガンを買う費用は、アジア、あるいは南米で十二人の司祭養成費に匹敵することを知らされたのである。

私達は、自分達の教会の指導者たちが提出した計画、『キリストの体における相互責任と相互依存』を真剣に研究すべく、喜んで受けた。

二、神は私達に、耳を傾けて聴く教会たるべく召し給うた。
私達はトロントにおいて、聖公会（アングリカン）は、他の人達と同じように、決して神の真理の独占的所有者ではない、ということを再び学んだ。私達は、神が語りたもうことを更に注意深く聞かなければならない。神は、聖書を通じて、祈祷を通じて、そして聖奠を通じて語り給う。神は、異った信仰をもつ人々、また、神を認めると否とにかかわらず、この世の事柄にたずさわっている人々を通じても語り給うのである。

三、神は一つの教会であるべく私達を召し給うた。
聖公会は他のクリスチャンから孤立して生存することはできない。現在ある教区は、教会との一致に入る準備をしている。こうした新しい生活に対しても、私達は援助を送り、交わりを保つようつとめるであろう。そして、それぞれの国において、また世界いたるところで、他教派のクリスチャンの仲間達と、一層緊密な関係を保って共に働くことを努めるであろう。

四、神は、人類の一致を確認すべく私達を召し給うた。
人種的差別、またその他のどんな差別も、罪である。私達は民族、皮膚の色、信条の相違の故に苦しんでいる人々に対して深い関心と同情をあらわすものである。私達は、世界のいたるところで、人種的差別やその他の差別待遇に対して勇敢に戦うことによって、キリストを証ししている人々を積極的に支援することを誓うものである。教会生活の中にさえ、まだ人種的差別が存在することをはずかしく思う。

五、神は、私達すべてを、司祭も信徒も共に召し給うた。
この会議に於いて、私達はいく度となく、教会の全ての動きの中で、信徒が司祭の協力者として、根本的に重要であることを認識した。この会議に出席した信徒代表は、より適切な訓練を受けることを熱心に望んでいる。聖公会の信徒は自分の信仰をより深く理解することを望んでいる。その信仰が、貧困とか、政治とか、人種問題とか、戦争と平和の問題に、どのように適用されるかを知り度いと望んでいる。信徒達は、キリストの証しが出来るために、その信仰が、毎日の仕事やレジャーに対して、どういうように適用されるべきかを、知り度いと望んでいる。
神はある教会を召して、拡大してゆく新しい機会に直面させてい給う。他の教会には、忍耐深い信仰を求めてい給う。また他の教会には、挫折や迫害に堪えることを求めておられる。十字架のメッセージは、こうしたことは、すべて、愛のうちに、共に分ち合うべき祝福であり、また重荷であることを教えているものである。私達は、神が、望んでおられることを、私達すべてと共になし給う、ということを深く心にとめるものである。

『あなたがたを召された方は真実であられるから、このことをして下さるであろう』（テサロニケ前 五・二四）
主キリストの御力があなた方すべてと共にあるように。

キリストの体における相互責任と相互依存

（一）

私達は一九五八年のラムベス会議以来初めて相会し、二週間を費して、世界各地における私達の教会に現在求められている必要と義務について考えて参りました。私達はすべての大管区（プロビンス）および地方（リージョン）を代表し、私達の実状について、また私達の世界と教会において神が何をして下さったか、そしてまた何を為しておられるかに

ついて、あるいはまた私達がいま直面しているまだ開発されていない新しい分野の事情について、互いによく話し合ったのであります。

このような話し合いの内容をかいつまんで言えば、多くの地域において教会の働きを盛り上げてゆくことが緊急に必要とされていること、またその為に資金や働き人が早急に必要とされていることを挙げられるでありましょう。これらの必要は絶対的であり、それを測ることができますし、またどうしても満たさなければならないものであります。しかしながら、私達の現在の情況をこのような側面からのみ説明することは誤っていると私達は確信しています。これ程までにいろいろなことが必要とされているのは、私達が貧しいからであるということではありません。そうではなく、このことは、私達がお互いについて、またキリストにある共同の生活について持っている考えや、心に描いていていることが、私達の現実の情況に対して全く時代おくれとなり、見当違いのものとなっているということを立証しているのであります。

今更申し上げるまでもなく、現代においては、これまで世界の中で従属的また第二義的と考えられて来た地域は、またたく間に新たな自主独立をかちえて舞台の中央におどり出て来ております、同じことが教会にも起きているのであります。私達の時代になって、全聖公会（アングリカン・コミュニオン）は成年に達したのであります。国民的、地方的諸教会の全世界的な交わりとして私達が呼んで来た性格が、突如として実在となったのであります。三百五十の全聖公会の教区の内十の教区を除けば、今やすべて自治教会の中に数えられるのでありますが、他方彼らと同じ血を引く人々は同じ地域で自らの政府を持っているのであります。私達の伝統的な絆となって来たキリストにある全的交わりは、にわかに、全く新しい次元で行われるようになって参りました。今や、「与える」教会と「受ける」教会というように語ることは適当ではありません。私達の時代の基調音は、平等、相互依存、相互責任であります。

私達の信仰の核心にみられる三つの中心的真理は、私達に次のことを命じております。

教会の使命は、自らの愛のうちに創造し、啓示し、審き、贖い、成就したもう生ける神への応答であります。私達の歴史を通して教え、また救うために活動したもうのは神であります。また神は、私達に神の愛を受け容れ、学び、服従し、その後に従うことを呼びかけておられます。

私達の全的交わりにおいて表現されているキリストにある一致は、政治的、民族的、文化的なあらゆる相違の中におかれている私達の間を結ぶ最も深い絆であります。

今や、この一致と相互依存が、全く新しい水準での表現と共同体的服従を見出さなければならない時が熟しているのであります。

ですから、私達の必要事は財力及び人材に余裕のある人々によって、いっそうの寛大さを単に表わして頂くことではありません。むしろ私達の必要事は、神がどのようにして私達の時代のしばしば痛ましい歴史を通して、充分に与えられた自由と交わりの賜物を見、それに適わしく生きるように私達を導いて下さったかを理解することであります。もし私達が、キリストがお与えになったものの責任ある管理人でないならば、私達はいま持っているものまでも失うことでありましょう。

（二）

もし私達が一致と服従の新しい形を見出すべきであるとすれば、私達は直ちに次の事柄を実行してゆかなければなりません。

第一に、私達は全聖公会を通じて必要事と資源の綜合的な研究に着手し、現在進行中の事業、（聖職者及び信徒の）人的資源、訓練設備、経済的資源及びその配分、そしてまたなおこれからも教会が直面してゆかなければならない未伝道地域、こういう事柄についての最新の検討された資料を提供しなければなりません。

第二に、私達はこのような長期にわたる研究の成果を待っていることは出来ません。私達は、各教会が今速かに経済的援助のために尽力する決心をつけて頂くことをお願いしたいのであります。既に必要と見込まれている資金は、現在私達の実際に組んでいる予算や事業の規模を遥かに超えるものでありまして、向う五ケ年間に少くとも五十億円が見積られております。これは生涯におけるただ一回限りのお願いであるかのようにお考えになってはいけません。

それは、これから先になって必要とされるものを全然考慮に入れずに、ただ第一歩を踏み出すために必要とされていると考えられたものとして受けとって頂きたいのであります。もし私達の教会の働きが、数限りないキリスト者達の献身から生れたものであり、それが生き続けてゆくべきものであるとするならば、与えるようにという願いは絶えず継続され、また増大され、強く要請されるでありましょう。

私達はこれを新しい中央基金としてではなく、キリストの体の内部におけるより高い水準の相互責任として考えております。これらの増大する資金源は、現存している機関や事業、あるいは新しく作られるものを通して、教会から教会へと有効に利用されるべきであり、それは私達の時代に極めて重要なものとなっている責任ある協力者としての自覚を強めるでありましょう。

このような援助によってはじめに可能となる事業計画は既に準備検討されており、近日中に各教会にそれが届けられるはずであります。ですからこの援助要請に対する早急な返答が待たれているのでありまして、そうすれば、その援助のための必要な調整は余程簡単になるでありましょう。私達は割当てを決めるとか、またそれができるとは感じておりません。それは各教会がそれぞれ他の諸教会と生活を共に分け合う必要を決めるはずですし、また共同の働きの遂行に最もよく参加する方法を決めるべきでありましょう。

この新しい援助を必要としているものは次の三つに分類されます。

1聖職者および信徒指導者の養成――これは既設または新しいセンター、旅行援助資金および奨学資金の準備の拡大、会議および修養会のためのセンター、文書活動およびそれに関連した活動のためのセンターを通じて行われます。

2新しくキリスト者の責任が要請されている地域における礼拝堂およびその他の建物の建設。

3幾つかの新設の大管区（プロビンス）が非常に必要としている援助の着手。これは彼らを物乞いする卑屈さから救い、また彼らの自由を名目だけでなく真実なものとする手段を与えることになります。これは大管区の生活および行政のために必要な最小限度の中央基金と、新しい教区として出発するに必要な設備を含むもので、これによって主教達は妨げられることなしに、彼らの使命の最先端に立ち、信徒達に対して神にある師父となることができるでありましょう。

第三に、私達は人材に関しても同様な協力をお願いしたのであります。全聖公会における司祭の絶対数の不足は千を以て数えることができます。司祭の養成は今後大いに援助して頂かなければならない大切な必要事の一つであります。しかし、私達は同じく真剣に信徒の人々についても考えているのでありまして、彼らが何処にいても、彼らの国の生活と奉仕の中にキリスト者として一層深く参加することを望んでいることについて考えております。これは、ある時には新興国家における国民的奉仕――その国民に品格と成長を与えることのできる社会を打ち樹てる聖なる仕事に挺身すること――を求める深い渇望の中に、最も生き生きと見られるでありましょう。すべての国家、すべての教会における男女は、どのようにしてキリスト者として奉仕すべきか、また世界に対するキリストの奉仕（ミニストリー）を自らの生活においてどのように果してゆくべきか、これを前人未踏の地の中に探し求めております。どの教会もその応答に満足しておりません。私達の教会は皆同様に、共に手をたずさえてこの探索に向ってゆかなければならないのであります。

第四に、私達は常に全聖公会内の協議連絡をはかり、これを一層密にしてゆかなければなりません。これは近年著しく深まったのでありますが、中央総主事（エキザキティブオフィサー）という職務を設けたことは正しい方向への第一歩であっ

たと感じております。私達はこの度、この立案、交流および協議の進行の一層の円滑をはかるために、更に地方主事（リジョナルオフィサー）を加えることに同意致しました。これはアフリカ、英国、インド、南米、北米、パキスタンおよび中東、南太平洋及び東南アジアの各地方に設けられるもので、このような地方主事達は全聖公会の全体と各部分との間の相互的協議を助け、それぞれの地域内における計画の発展を援助し、また特にこれは重要と思われますが、共同計画を助長し、そして世界教会関係およびその諸計画を強化することに主要な役割を果すことになるだろうと思われます。

私達はまた相互的協議が迅速に効果を挙げてゆくために、地方主事やその他の顧問達と一緒に、私達自身の間の協議をもっとひんぱんに行うことに同意しました。私達はまた、全聖公会のすべての部分から集められた幾組かのチームをもちいて、新しい伝道事業をとにかくできる所から計画するよう、すべての教会にお勧めしたいと思うのであります。同じく私達は、すべての教会が大管区間を通じたこの種の協力関係を考慮し、また拡大することを切望するものであります。私達は、このように一層お互いの生活を共に分け合うことを促進するために、俸給の規準、教育上の資格、恩給制度等の研究を継続するよう提案致します。

第五に、各教会は自らの使命（ミッション）に対する服従の形と、到る所にある私達の教会が一つの生命と証しに参与しなければならないという必要を根本的に研究しなければなりません。使命（みつしたん）とは他の人々に与えるということだけではなく、同様に、共に分け合うことと受けることでもあります。もし立案および地域的事業において先ず優先するものは何かが決定されるべきであるとするならば、そしてまた、全聖公会の共同の生活がもっと平等に分け合われるべきであるとするならば、このことにおいて本質的な要素はすべての教会は自分自身をよく知るということであります。すべての教会は資源と必要としているものの両方を持っています。もし立案と責任ある協力ということが真に相互的であるべきだとすれば、私達は皆、組織的に、またできるだけの最善の援助を得て、一体何を持っているか、何を必要としているか、仲間のキリスト者達との大きな協力関係に加わってゆくために、神は私達を何処に召しておられるかを自分自身に尋ねなければなりません。

最後に、私達は全聖公会（アングリカン・コミュニオン）の性格について、そしてまた、一人の主の使命（ミッション）が私達を一つの体に結び合せているのですが、このことが私達にとってどのような意味を持っているのかということについて、大人らしく、感傷を排して直面しなければなりません。各教会それぞれについて、「古い」とか「若い」、あるいは「与える」とか「受ける」というような言葉を使うことは、世界の中で、そして私達の聖公会の中では、現実的でもなく、また真実でもありません。使命とは幸運な者から不運な者への親切ではありません。それは神の使命（ミッション）であり、唯一の神への相互的な、一致した服従であります。教会の形式もそれを反映するものでなければなりません。

（三）

以上の必要事に直面するに当って、私達は次の計画を全聖公会（アングリカン・コミュニオン）のすべての教会に、例外なく提案致します。

第一に、各教会は—任意に—、現存する機関または新しい方法を通して、全聖公会に属する他の諸教会と協力するために、経済的および人的援助を増大するよう直ちに実行に移ることであります。各教会は自らの日程、目標、及び方法を明確に設定しなければなりません。しかし、世界の多くの場所で、このような協力関係を結ぶために私達に残されている時間は極めて僅かであります——既にある所では扉が閉じられてしまいました。

第二に、各教会は直ちに、使命への自らの服従について徹底的な研究を始めることであります。この中には、その教会の機構、使命（ミッション）についての神学、決定に当っての優先事項に関する研究も含まれるべきであります。私達は、私達の機構が世界に対して、また今あるがままの教会に対して適したものであるかどうか、そしてもしそれが不適当であるならば、どのように変えてゆくべきかを尋ねる必要があります。私達はまた信徒および聖職者の訓練についても検討し、実際に神の使命が私達の教育において中心となっているかどうかを尋ねる必要

があります。私達は、「使命」という言葉を何か他の人のためにすることを表す言葉として使っていますが、その言葉の意味を厳格に検討する必要があります。私達は、私達の優先事項をよく検討し、果して私達自身にとって第二義的に必要なことを私達の同胞にとって本質的に必要なことに優先させていることはないかどうか問う必要があります。例えば、ラゴスとかニューヨークにある一台の新しいオルガンは、アジアや南アメリカにおいて十二人の司祭を訓練することができたものであったかも知れません。インドあるいは英国において古くから受けつがれて来たある施設は、既にその役割を終えてしまったものでありますが、それを維持していることが南太平洋地域とかウガンダにおいて訓練を受けた教師の不足を招いていることになるかも知れないのであります。

第三に、各教会は与えることと同時に受けることの方法を探し求め、大いに期待をもって、他の諸教会や文化が何を自分達の生活にもたらしてくれるかを尋ね、また他の諸教会と自分達の課題や問題を共に分け合うことを切望することであります。もし全的交わりが単なる儀礼的な象徴であると考えられるならば、それは殆ど無意味なものとなりますし、また、もしそれが私達の共同の生活と運命の表現であると理解されるならば、非常な意味を持って参ります。私達は共に立ち、共に倒れるのであります。なぜなら私達はキリストにあって一つであるからです。ですから、私達は受けることと分け合うことを探し求めてゆかなければなりません。

第四に、各教会はキリストの後に従っているかどうか他の人々への使命と奉仕という試金石によって、自分達の生活におけるすべての活動を検討評価することに努めることであります。教会は同好者、あるいは同じ肌合いの人々のクラブや協会ではありません。全聖公会は、たまたまその歴史的な発生の仕方からその名をつけられたのでありますが、英語文化を全世界に広めようという連合体ではありません。果して私達の教会が自らこのような姿を呈するあやまちを犯していないでしょうか。犯しているとすれば、それは私達自身の永続と伝統を、私達の義務でありまた目的であると考えていることでありますから、私達は罪を受けるに値するのであります。教会は証しをなし、服従し、奉仕するために存在します。私達の企てることはすべてこれによって吟味されなければなりません。

最後に、各教会は速やかに、全聖公会における――誠に、キリストの教会全体における――仲間達とのあらゆる交流の機会と道を発展させる必要があります。これは単なる印刷された言葉とか稀の珍客というようなことで終らせてはなりません。それはお互いの実情や生活に深くそして慎重に責任をもって入ってゆく事柄であります。それは、私達が各地の教会で会衆に教えていることに新しい方向づけをすることを意味します。それは、私達の祈りの構成に根本的な変化が起きることも意味します。それは、異った種類の人々が大いに交流交歓する機会を作ることを意味します。それは、私達の共同の生活と相互依存が表現されることが出来るような、沢山の計画された方法を意味しております。

(四)

私達は、今提案したような計画がそっくりそのまま理解され、また受け容れられるならばそれは、現在私達の教会が馴染んでいる多くの事柄の死滅を意味するであろう、ということを承知しております。それは私達の優先事項に極度の変化をおよぼすでありましょう――それは、少くとも私達が自分達自身のために費していたと同じだけのことを他の人々と一緒に分け合うように導くでありましょう。それは昔ながらの孤立と先輩からうけついだ態度の死滅を意味します。それは各教会において、多くの自分達にとって望ましいと思われる事柄を、喜んで放棄することを意味します。

要するに、私達が真実に求めていることは、全聖公会の生れかわりであります。それはたくさんの古い事柄の死滅を意味しますが、――それよりも更に優って――全く新しい関係の誕生を意味しているのであります。これこそ今や全聖公会に属する諸教会の前に置かれた本質的な課題であると私達は考えるのであります。